# 天才どもに囲まれたアホな僕の存在価値

ムーンデイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天才どもに囲まれたアホな僕の存在価値

【Ｎコード】
Ｎ２２４９Ｏ

【作者名】
ムーンディ

【あらすじ】
勉強なんかわかんねぇ。運動はできるわけがない。
イケメン見ると殺意が沸くブサメンですよ。
ＨＵＴＵＵサイコーと叫びたいところだが、残念なことに僕は普通だと自称する兄とも違う。
天才にも、普通にも、恵まれず……神が行なう不公平な能力分けに”アホ”の二文字を与えられた。
このお話は俺ＴＵＥＥＥではなく、オレＨＵＴＵＵでもない、僕ＡＨＯＯＯな少年が存在する価値を求める物語。

## 01　―　天才とアホ

「うわぁー、セックルしてぇー」
「おい変態さん、一話冒頭からいきなり何いってんだよ。しょっぱなから下品な発言したら読者さんたち逃げちゃうだろ」
「すまん、すまん。暇だったんで、つい本音を……」
「一度あの世に送ったろうか？」
「いいねぇ。リクエストを受け付けてくれるのなら、あそこにいる女子中学生のスカートの中という天国に送って欲しいものだね。あの中で死ねるのなら本望だぜ……」
「ごめんなさい、ごめんなさい、謝るからそれだけはやめて。やらないからあの中に行って死なないでください。ロリコンで変態な男子大学生さんが女子中学生さんのスカートの中で親友さんに殺されました、とかマジ勘弁。つーか、もっと小さな声で話そうよ。周りの目が痛い……」
帰宅中の電車の中で、一方的に変態（犯罪）話を聞かされている。正直、アホな僕にはレベルが高い内容です。
何で幼い子が好きなの！？
何で電車の中で堂々と変態話が出来るの！？
しかも何で指さして！？
というか冒頭の「セック〇してぇ」ってアレもしかして女子中学生さんに向けて言ってました？
マジでやめてください。勘弁してください。
本当にありえないと思う。けど親友さんたちに「ありえない」と言えば、必ずこう返されるはずだ。
――ありえないなんてありえない。
「どうしたんだ、タクミ。頭を抱えて。腹でも減ったんだろ？」
「違う。ありえないと思ってさ……」
「ありえないなんてありえない」

「わーってるよ。何万回も聞いたから」
「つまりだ。女子小学生のスカートの中で死ぬなんてこともありえなくないってわけだ」
「それとこれとは別だ！　というか女子中学生さんよりもヤバイから、それ！」
帰宅ラッシュで混んでいる電車の中で、堂々と変態（ロリコン）発言をしているのは僕の親友さん。
彼の名前は長瀬（下の名前は知らないけど本人曰くきぼうの希があるらしい）。
僕は夏目拓海（なつめたくみ）。ありとあらゆるところが普通の兄さんを持つアホな弟さんです。
僕たちは歌空大学に通っている大学生二年生さん。
もちろん成績は余裕でトップをキープ。
幼稚園の時から下から数えて常にトップの座を守り続けていると、胸を張って言える。
それが唯一、自慢できそうでできないことだ。
「タクミー。三ヶ月後、試験期間じゃん？　一緒に勉強しないか？」
「……」
世界は、神様は本当に不公平だと思う。否、理不尽だ。
勉強なんか全く分からないし先生からもアホと呼ばれるほどの僕の性格は至ってノーマルのはずなのに勉強以外の事も全然できない。
しかし。長瀬は天才だ！
いや、違うな。中学までは長瀬も僕と同じアホな人間だった。しかし強くなりたい賢くなりたいと願い続け、努力の末に手に入れたのはチート能力。
詳しいことを書くと長くなるので後ほど。
「んでさ、勉強のあとは……うふふふ。スク水すきか？　スゲェのが手に入ったんだぜ」
「……」
悲しくなるので、言わせてください。

何で僕はノーマルなのにアホなんですか？
何で長瀬（こいつ）は変態なのに天才なんですか？
ありえないなんてありえねぇだ？　それは幻想だ。先ずはそのふざけた幻想ぶち壊す！
ありえないなんてありえないなんてありえない！
世界なんてありえない事だらけじゃんか！
なくなっちゃえ！

――刹那、世界が一変した。

それが訪れたのは突然の出来事だった。
瞬きをした短い間に、日常が文字通り崩れたと直感で感じ取れた。
目の前で変質者と間違われそうな会話をしていた親友が消えた。
ギュウギュウ詰めとなった車両から全ての人が消えた。
「なにが一体……」
瞬間、それは現れた。
僕はそれの出現と同時に察した。
周りにいる人がいなくなったのでは、ない。
消えたのは、僕なんだ。
人が。
物が。
星が。
宇宙が。
銀河が。
万物が。
拒絶するかのように、僕が”知る普通の世界”から弾きだしたんだ。
「うあぁ、あぁ……」
言わないと呼ばないと叫ばないと……とにかく声を喉から出さないと。

口から言葉を大声に乗せて、求めるんだ。
――だけど、出ない。
喉に恐怖という名の蓋を閉められているかのように、思うがままのことを現実に出来ない。
僅かな口の隙間から雑音（ノイズ）みたいな音しか出ない。
「う、くぅ……く、来るなっ！」
押し出すように吐き出した台詞を、襲い来る異物にぶつける。
だが、止まらない。
一歩。
また一歩。
確実に迫る。
更に近寄るたび、徐々に異質な体を変化させている。
肉体、表情はおろか光すらも感じられない”黒い何か”は、無音で形状を作る。
その姿は……巨大なオオカミ。余裕で二メートルは超える。
怖い。逃げたい……心の底から望んでいる。
「いや……く、来るなよ……」
でも、脚が凍りついたみたいに動かない。
どうしよう……どうしよう……死にたくない！
――刹那、跳ぶ。
怖い。
死にたくない。
生きたいよ。
動けよ、何で動かないだ僕の体！
――刹那、視界いっぱいに広がる巨大な牙。
ああ、そうか。僕は、ここで死ぬんだ。
まだアイツらに「ありがとう」と伝えてないのに……。
ゴメンなさい……っ。
「……邪魔」
「え……っ！？」

スパッ！　綺麗な音が車両内に響いた。
次の瞬間。
目の前で僕に噛み付こうとした異物が真っ二つになり倒れていく。
そして、下から少女が舞い上(のぼ)った。
そう。舞い降りたではなく、舞い上(のぼ)った。
ドロロンと緊張感の欠片もない効果音を出し、床から大鎌を両手で持って現れた。
異物を、ガラスの様に透明で綺麗な大鎌で切り裂いた。
翡翠色の長髪を靡かせて、小柄な体で自身の身長の倍はある大鎌を軽々と振り回す少女。
「退(ど)いて」
死んだ魚のような目をした少女は、イラついた口調で言った、
「――一ようやくアキラとカケルが性別の壁を超えた瞬間だったのにさ。バケモノ、アンタの体で全力で罪を償いなさい」
「ちょっとまってええええ！　何でそこでボーイズラブ！？」
「ダマレ、邪魔って言ったでしょ。キサマモコロスゾ」
「はい、すみません」
天国のお兄さん……僕、また天才(へんたい)さんに会っちゃったみたいです。
これからいったいどうなっちゃうんでしょうか……。

## 02　一　異と心

「え……っ！？」
スパッと綺麗な音が車両内に響いた。
次の瞬間。目の前で巨大な口を開けていた異物（バケモノ）が真っ二つになり倒れていく。
唖然として、その光景を首を傾げて眺める。
一体何が起こったのか？
そして、二つに別れた異物の間から少女が舞い登った。
床（した）から、ドロロンと緊張感の欠片もない効果音を出し。
両手でガラスのように透明で美しい大鎌を持ち、現れた。
翡翠色の長い髪をとこからともなく吹く風に靡かせて、自身の身長の倍の大きさはある大鎌を軽々と振り回している。
「退（ど）いて」
振り向きざまに大鎌を僕に向ける。
死んだ魚のような目をした少女は、イラついた口調で言った、
「――一ようやくアキラとカケルが性別の壁を超えた瞬間だったのにさ。バケモノ、アンタの体で全力で罪を償いなさい」
「ちょっとまってええええ！　何でそこでボーイズラブ！？」
「ダマレ。邪魔って言ったでしょ。キサマモコロスゾ」
「はい、すみません……って、あれ？」
何故か僕は頭を下げた。
――威圧！
彼女に睨まれると不思議な感覚に襲われた。
痛くて、苦しい……。
彼女にギロッと睨まれると僕という一個の存在は、彼女の存在に飲み込まれて潰されてしまう、そんな感覚。
僕より頭一つ小さな少女。
だけど、隣に立っているだけで息すら出来なくなるくらいの威圧

感。
否、存在感。
何者なんだ、このボーイズラブ少女は？
「アンタ、何で倒れないのさ？」
「……え？」
「そういえば。何で、ここにいるわけ？」
「……質問の意味が分からないのだが」
なぜ僕が倒れなくてはいけないのか。
なぜ僕がここにいるのか。
前者はともかく、後者のほうは知りたいのは僕の方だ。
少しまて、何でここにいるというのはどういうこと？
ここは電車の中だよね？
いてもおかしくないはず。
おかしいのは消えた人と、現れた異物（バケモノ）。
しかし彼女の質問は、まるでおかしいのは僕の方ではないか……。
「きみ……もしかして、何が起こっているか、分かっているの？」
「まあ、いいわ。私は初めてだけど、聞いた話じゃ稀にいるらしいから」
「いったいぜんたい何が起こってるんだ？」
「しかし今だに信じられないわね。私の気合を受けてなお倒れないなんて」
「他の人達は？　あのバケモノはなに？」
「……ウザ。何なのさアンタ？　私に惚れてるわけ？　うわ、キモい。マジで引くわ。っつか、ダマレの意味が分からないのかしら。もしかして一から日本語を教えなきゃならないわけ。うわ、メンドイ。なにこのキチガイ。人間としておしまいじゃない」
「……」
何なんですか、この少女。普通、初対面でそこまで言いますか。
こっちは何がなんだか分からなくて不安でどうしようもないと言うのに、この少女……否、この女……。

僕がいつまでもおとなしくしていると思ったら大間違いだぜ。
大人をからかうとどうなるのかを教えてやる。
僕が「助けてくれてありがとう。だがな、一言二言三言と多いんだよ。僕だって好きでここにいるわけ」と、きつく説教を初めてすぐに「そこ危ない」と僕を突き飛ばす。
「イテッ！　な、なにする……え？」
二つに斬られた異物（バケモ）が……文字通りに二つに別れた。
それぞれ半分の体を再生させて、二体に分裂した。
巨大な異物（オオカミ）が二体。
グルルと二体の異物は唸りをあげて、まっすぐと僕を見据えている。
「うそ？　な、な、なんで？　もしかしてこのバケモノの狙いは……僕？」
「そうみたいね。しかもアンタといい、異物（イブツ）の再生力といい……アンタはかなりの使い手と見ていいわね」
「いい加減にしてくれ。一人で勝手に話を進めやがって。いったいぜんたい何がどうなってるのかくらい教えろよ！　アイツは何だ？　テメェは何だ？」
僕は彼女に怒鳴りつけた。
バケモノ？
そんなの知らん。全力で逃げればいい。
彼女は何か不思議な力を持っているみたいだから、さっきみたいにバケモノを倒してくれるはずだし。
恐怖？
ありまくる。早くそれを取り除きたい。
だから教えてくれ。
「……誰に口を聞いてるわけさ、アンタ。もう一度、言うわ……ダマレ」
「ハイ、スミマセンでした……っ！？」
――威圧。

まただ。
押しつぶされそうな感覚。
何故かまた頭を下げる。
「けど、私にも非はある。だから特別に話してあげる。ここは現実と同じ空間に存在するけど、現実より上の次元に存在する空間。私たちは異空間と呼んでる。そして、あれは異物(イブツ)。人の心から生まれた化身」
「人の心から生まれた……化身？」
「そう。正確には、あのイブツはアンタの心から生まれたイブツ」
「え？」
「最後に私は……加藤(かとう)綺華(あやか)。イブツの力を自在に操ることができる者――」
彼女は言う、
「――心士(ソウラー)」

## 03　―　魔と力

「誰に口を聞いてるわけさ。もう一度だけ言うわ」
僕が怒声を上げたのが気に入らなかったのか、彼女の声は震えていた。
まさに逆ギレ。
彼女は刺すよう視線を僕に放ち、
「ダマレ」
と大声で一喝する。
――威圧。
再び襲いかかる重圧感に「ハイ、スミマセンでした……っ！？」と体が勝手に頭を下げていた。
まただ。
押し潰されような苦しい感じ。
もしかして、この子は超能力者なのか……！？
「……まあ。でも、私にも少しは非がある。だから話す」
「話してくれるのか……？」
僕の問い掛けにコクリと頷くと、彼女はポケットから五枚のカードを取り出す。
左手に大鎌、右手に五枚のカード。
これだけだとカードが邪魔ではないのだろうかと思うのは僕だけじゃないはず。
その間に、二匹の異物（オオカミ）は同時に、こちらに向かって走ってきた。
彼女は真ん中のカードを口で掴み、
「発動」
プッとカードを飛ばす。
宙をヒラヒラと舞うカードは、突然、紅色の光を発すると消えた。
次にコンクリートの壁が僕たちと異物の間に出てきた。
ドォオンッ！

凄まじい音がなった。
異物が壁に衝突した音だとすぐに理解できた。
「ここは私達が住む地球……現実世界と同じ空間に存在する、もう一つの世界。けど、普通の人々はその世界を認識することはできない。何故なら現実より上の次元に存在する空間だから。異空間、異世界、上位空間、上位世界と呼び名は沢山あるけど、私たちは上位世界（モンド）と呼んでいる」
「上の次元にある、アップ（アップ）、も、もん……ど？」
「アンタを襲った黒いアレ。あれは異物（イブツ）。人の心から生まれた化身で、アップモンドでしか具現化できない。想いという名の形の幻想。で、オオカミみたいな形をしてる二体のイブツはアンタの心から生まれたイブツ」
「え……僕の心から？　どういうこと？」
「話すと長くなるから、また後で。それと自己紹介くらいさせなさいよ」
「あ、うん……夏目拓海（なつめたくみ）」
「私は加藤綺華（かとうあやか）。イブツの力を自在に操ることが出来る者――」
彼女は言う、
「――心士（ソウラー）」

――――――――――

「加藤綺華（かとうあやか）。イブツの力を自在に操ることが出来る者――」
私はマヌケなアポーン顔を晒している彼に言い放つ、
「――心士（ソウラー）」
思ったとおり。彼は言葉の意味が分からず呆然としている。
私はイブツに邪魔されぬよう作った”心の壁”を見つめ、右手に持っている四枚のうちの一枚を口で掴む。
それを吐き捨てる。
――発動。

ブラブラ落ちていくカードに向かい念を、心を飛ばす。
瞬時にカードは私の心、想いに反応し”私の幻想が現実を侵食”する。
”心の壁”が崩れていく、もちろん、それに遮られた二体のイブツが出てきた。
「え、うわあああ、か、かべが！？」
後ろで喜ばしい歓声が聞こえる。
うん！　やっぱり恐怖で震えている声は最高だわ。
でも”彼”は危険だから、
「大丈夫よ。見てなさい」
壊れた壁の破片が一斉に動く。
全て、二体のイブツを襲う。
その数、約１００。
数が多すぎてコントロールが大変だけど、これが一番楽な戦術。、
「す、すげ……」
「まだまだ」
更に口に加えた一枚のカードを飛ばす。
――発動。
左手に持つ大鎌は炎を纏う。
これで決める！
一撃必殺！
「てやあああ」
跳ぶ！
二体との距離を一瞬で縮め、
――炎斬っ！
一振り。
たった、これだけで終わった。

## 04　一　解と終

――発動。
ゆっくりゆったりと落下していくカードに向かい念を、心を飛ばす。
瞬時に飛ばされた心は落下するカードと共鳴し合い、私の想いに反応し”幻想が現実を侵食”し始める。
”心の壁”、心壁（しんへき）を崩す。
遮られた物が消えて、もちろん二体のイブツが、こちらに向かってきた。
「えぇ？　ちょ、うわああ、か、壁が壊れた！？」
後ろに立つ夏目拓海と名乗った彼は、腰を抜かして驚いた。
喜ばしい歓声と反応。うん、やっぱり恐怖する声は最高の特効薬だわ。
でも、夏目拓海に恐怖心を与えるのは危険だから、
「大丈夫よ。みてなさい」
と頭を下げて感謝して欲しいくらいに、私は珍しく優しい声で彼に言う。
――想像。
幻想が現実を侵食し、幻想は幻想でなくなる。
そう、幻想を現実する。
粉々に壊れた壁の破片一つ一つが、一斉に動いた。
それはまるで意志がある全（ぜん）で一つの生き物のように、二体の異物に襲いかかる。
その数は約百個。
大小も姿形もさまざまな百個もある破片を一度にコントロールするのは至難の業。
だけどプログラム内にアルゴリズム……つまり手順やルールを設定すれば、一番楽で確実な戦術。

「す、すげ……」
「まだまだ」
もう一枚、カードを口に加えて飛ばす。
――発動。
左手に持つ私が愛用する大鎌は真っ赤な炎に包まれる。
無の属性の鎌に属性を追加した。
これで決める、一閃斬殺！
「てやあああ」
地を強く蹴り上げ、宙を駆ける。
二体の敵に向かい――、
殆ど刹那。
一瞬で距離を縮める。
――炎斬っ！
横に一振り。
たったそれだけで、全ては終わった。

――――――――

加藤綾香と名乗った彼女は、一瞬で異物の目の前に迫ると二体を同時に斬った。
直後、斬られたイブツたちは蒼い色の炎に包まれたと思ったら、灰となって消えたのだ。
そして――
――衝撃っ！
小さく爆発した。
「……た、倒したのか？」
「ええ。安心した？」
「あ、い、え、う、うん……あ、ありがとう」
本当はなぜかそこまで喜べないでいる。
なぜか妙に虚しい感じがするんだ。

助かったはずなのに何故か嬉しくない。
救われたはずなのに何故か安心できない。
大きな穴がポカリと空いたみたいな感じ。
心のどこか。
後味が悪い……もしかして、さっきの二体のイブツが僕の心の化身だったから？
彼女が僕の心の化身を倒したから……つまり僕の心の一部が消されたから、こんな気持になったのかな？
「嬉しくないの？」
「そ、そんなことないよ！　加藤さんには凄く感謝してる！」
「ふぅ～ん。でもアレはアンタの心から生まれた魔物よ？　つまりアンタの心の一部。私はそれをいとも簡単に消し去った。だから虚無感はあるはず。それも嬉しさや喜びなんか比にもならないくらいの虚無感が」
「う、うん……実はまったくいい感じはしないんだ」
「やっぱり」
「なあ……消えた僕の心ってどうなるの？」
「知らないの？癒えない傷なんてない」
「良かった」
「けど」
「？」
「アンタは危険だわ」
「はい？」
「だーかーらー。アンタは危険なの。今の今までだけで有り得ないことだらけだったんだからさ」
刹那という短い時間で、加藤綺華は僕の目の前に現れた。
視界いっぱいに広がる日本人形のように整った方。
まるでキスをするかのように顔を近づけられて、ドキドキするぜ……。
「全てを忘れてもらう」

「……はい？」
「ひれ伏せ」
「ぐは……っ！」
体が勝手に動いて、彼女に土下座をする。
動かない。動けない。
自分の体なのに自分の体じゃないかのように言うことを聞かない。
助けてくれたのに……なんで恩人に襲われなきゃ行かないんだ。
「威圧する。全て忘れなさい」
「あ……っ」
意識が遠のいて行く……。
なんだろうか。
苦しいのに気持ちがいい。
否。楽になっていく。
もしかして……僕ってマゾだったのか……。
そんなどうでもいいことを思いながら僕の意識はここで途切れた。

## 05　一　日常にさようなら

「アンタは危険だ」
加藤綺華（かとうあやか）が告げる。
突然の告白に僕は呆気にとられ「……はい？」と間抜けな声が口から漏れた。
そんな僕に構わず加藤綺華は、
「だーかーら」
「ちょ……っ！？」
刹那という短い時間で僕の目の前に移動してきた。
「アンタは危険なのさ」
視界いっぱいに広がる日本人形のように整った綺麗な顔。
けど表情は無。
瞳からは「お前は敵だ」と敵意や殺意が僕に送られてくる。
「今の今までだけであり得ないことだらけだったんだから。イブツが自身を作った主を上位世界（アップモンド）に呼んで襲うとしたり。イブツが生物の姿形を取ったり。斬られたイブツが再生して二体に分かれたり。だけどね、一番の問題はアンタ自身。いや、違うわ……アンタの心」
「え？　へ？」
加藤綺華と名乗った僕の恩人だった人は言う、
「んなあり得ないイブツを創りだしたアンタの心。故に全てを忘れてもらう。その場に平伏せ」
「ぐはっ……な、なんで……また、だ……っ」
体が一人でに動いて、何故か僕は彼女に土下座をする。
僕の体なのに、まるで僕の体ではないかのように言うことを聞かない。
「命じる。上位世界で見た聞いた体験した出来事は……全て忘れろ」
「あ……ぁ……」
心臓が握りつぶされるみたいに、息苦しい。

体から、心から力がどんどん抜けていく。
意識が遠のいていく……。
なんだろうか。
苦しいのに痛いのに泣きたいほどなのに気持ちがいい。
否。背中から重たい荷物がスポッと落ちたみたいに楽になっていく。
もしかして……僕ってマゾだったのか……。
そんなどうでもいいことを思いながら僕の意識はここで途切れた……。

――――――――

右も左も上も左も前も後ろも真っ暗。
真っ暗闇の中、いつからここに居たのか分からない。
気がついたら何故か僕はここにいる。
ずっと、
ずっと、
ずっと、
――未来永劫。
何も考えない。
何もしない。
ただここにいるだけ。
これが僕の価値だから。
「……まだ気付いてはくれないぬか」
何も無い無の世界……闇の空間に懐かしい声が響いた。
初めて聞いたはずなのに、懐かしく感じる謎の声は、弓から放たれた矢のごとく僕の心に突き刺さる。
君は誰？
なんで寂しいそうにするの？
何で君の言葉は僕の心を動かすの？

「……俺ぬ声が届いているぬか？　俺ぬ声が聞こえるぬか？」
聞こえるよ、痛いほど聞こえるよ。
僕の耳に、違う。
僕の心に届いているよ、君の声……いや、想いは。
君は誰なの？
「僕が誰だか分からないか。なら、いずれ分かることだ。逆に問う……貴様は誰だ？」
僕が何者か？
僕という存在は何なのか？
考えたこともない。
けれど、言えるのは僕は僕。
ただの大学生。
「違うな、間違っているぞ。考えたこともないだと？　貴様は幾度も存在価値について悩みに悩んできたはずだ。ただぬ大学生だと？　自分ぬ存在価値を知る貴様がただぬ大学生？　普通ぬ人間？　笑えぬ冗談は言うな」
言っていることが分からない。
君は僕に何を伝えたいのか。
間違っている？
僕が何回も自分の存在価値を考え込んでいたこと？
僕はただの大学生でも、普通の人間じゃないのか？
存在価値って何？
「それは本当ぬ貴様ぬみが知る……真実」
彼は言う、
「……そろそろ下位空間（ダウンディメンション）に戻れ」
下位空間？
ここは上位世界なのか？
「今は眠りから覚める時だ……夏目拓海（なつめたくみ）」
――――――――

「ふわあぁぁ……ってアレ？　何で僕ベットで寝てるんだ？」
起き上がると見慣れたベット。
見慣れた天井。
見慣れた……というか僕の部屋だった。
「……昨日、帰宅中からの記憶がないのだが」
学校を出て、いつも通り天才（バカ）な長瀬と一緒に電車を乗って、いつも通りばか話をしていたのは覚えている。
だけど、それ以前の記憶がない。
まるで刈り取られたかのように。
「まあ、いっか……」
たぶん寝る前に酒でも飲まされたのだろう。
うん、絶対にそうだ。
と自己納得して僕はいつも通りの日常を過ごしに行く。

否、最後の日常を過ごし終えた僕は。
最初の非日常へと足を踏み入れる――。

存在価値を求めて。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2249o/

天才どもに囲まれたアホな僕の存在価値

2010年10月24日01時10分発行